

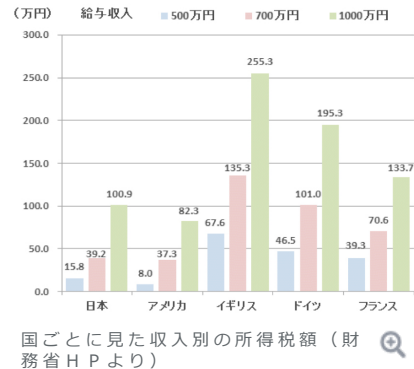
税金が高いドイツで豊かに暮らせる理由

財政、税金、市民生活の日独比較【その2】

高部英明 ドイツ・ヘルムホルツ研究機構上席研究員、大阪大学名誉教授

日本のような「自己責任社会」とは異なる政策のドイツは自立^{2018年01月10日}した国民が高い税を納め人生を豊かに暮らしている。実は、2年4カ月前、ドイツに移住してすぐ税金について考えさせられた。来る前に額面の月額給料を聞いていて「こんなもんか」と受け止めていた。しかし、最初の給料をもらい調べると、税金などで多額を引かれている。所長に「こんな給料では生活できない」と訴えた。「では調べてみよう」と言ってくれたが、結局、正しい受取額であった。

あとで分かったことだが、ドイツの税金は高い。図は国ごとの年収別による所得税の額である。ドイツに来て、所得税が2倍に増えた。欧州の国の税金は皆高い。欧州は成熟した社会であり、長い歴史と列国間の競争から、国民（国力）を大切にするために大きな政府で貧富の差を是正し、社会インフラの整備をしている。これに対し、米国は共和党が唱える小さな政府が伝統的に強く、日本より税金は少ない。



同じ事は消費税についても成り立つ。ドイツは19%だ。ドイツは内税だから余り気にならないが、以前、ノルウェーに旅行した時、レストランで請求書を見て驚いたことがある。料金の25%が付加されていた。消費税もやはり欧州は高い。

衣食住の物価は安く、大学生の授業料は無料

しかし、住んでみて分かったことがある。私が住むドレスデンは物価が安く、自宅で料理して生活する分には、家賃を入れても給料の半分もあれば充分である。スーパーで大きな買い物カゴを押しながらあれもこれもと山ほど選んでレジに進んでも、合計が1万円を超えない。日本だと、手提げのカゴに2杯も買うと1万円は平気で超える。基本的な食料品の単価が安い。だから、生活にお金はそんなに要らない。（1ユーロ＝130円で換算）

大学生が1カ月に必要な生活費の平均は約10万円と聞いて驚いた。授業料は無料、住まいはシェアハウス、大学の食堂では食事代が教員の半額である。大学を出るまで、国が若者を税金で支援してくれる。次世代の人材育成こそ国家の最優先事項である。

ドイツでは共稼ぎが当たり前で、また、女性が働きやすい職場環境や保育制度が整っている。だから、二人で働いてベンツに乗り、地球の裏側で休暇を楽しむ贅沢な生活ができる。そして仕事に関する考え方も違う。仕事は生活の資金を得るために行うのであり、会社など組織のためではない。個人が全ての基本だから、契約以上の仕事が舞い込むことはない。

加えて、日本人のように美食家でないドイツ人の食事は、栄養さえあれば良いというメニューが多い。まずくはないし量がある。スーパーには、寿司や刺身のような高額な品は置いていない。肉は1キロが500円程度からあり、ビールも

500mlが30～100円程度。友人の日本人が大きなスーパーのワインを飲み比べたら。ボトル1本が300円の白が一番おいしかったそうだ。

家賃も日本に比べるとまだ安い。ただし、現在は人口が増えつつあり、住宅価格は年5%程度で上昇しているそうだ。州政府は若者の持ち家を支援しており、低金利のローンがあると聞いた。しかし、旧東独で人気があるのはドレスデンとライプチヒ、イェナ程度で、他の都市は人口が減りつつある。ドイツでも少子高齢化は大きな問題である。

服装も至ってカジュアル。男性は年齢構わずジーパンがほとんど。女性も年配者を含めてジーパンが5割を超える。若い女性もラフな服装で、日本のように着飾った女性は見かけない。若い女性の大半は夏にレギンス（黒タイツズボン）をはいている。スタイルが良いので似合う。スカートの女性など見たことがない。衣・食ともいたって質実剛健。家も借家が多いそうだ。「人の目を気にしない」文化だ。以前書いた「自立性こそ教育理念」の国である。

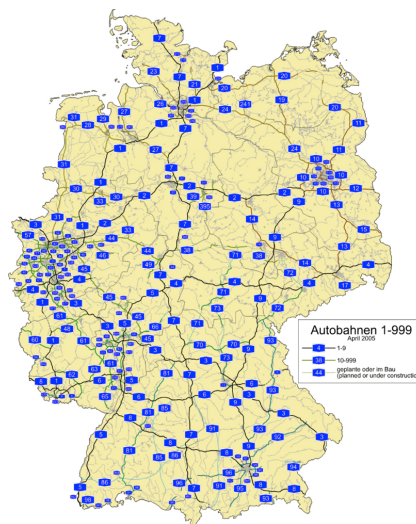


隣の大学院生（右）がはいているのが「レギンス」

支払う税金には、私が住むザクセン州の税金とドイツ政府の連邦税がある。消費税は19%だが食料品などは7%である。面白いことに、ハンバーガー店で「持ち帰り」で買うと7%だが、店で食べると19%。判断は灰色だが、概して細かいことをドイツでは問題にしない。

インフラを維持するため相応の負担

ドイツは物価が安いと書いた。だが、ガソリンは1リットル約180円。日本以上に高い（米国はその半分以下、約70円）。当然、料金に含まれる税金が高い。しかし、理由は無料の高速道路網「アウトバーン」を走っていると良くわかる。必ず道路工事をしている。それも、片側を通行止めにして、残りの片側を対面交通にするために新たに長い線を引いている。これを年中、色々な場所でしている。速度制限無しで走らせるからには徹底した整備・補修が必要なため、コストはかかる。ただし、国土の8割が平地と、地形の条件が恵まれているので、図のように国全体を網羅できる。



「制限速度無し」のドイツのアウトバーン網

ドレスデンには市全体を網羅するトラムが走っている。便利で、車窓の景色など情緒がある。乗客が少ないのに約10分ごとに運行している。当然、税金が使われている。女房は1カ月乗り放題の券を6500円で買い、日本人女子会に頻繁に出かけている。この券があると金曜日の午後6時から週末は同伴者も無料になる。市民を外に出して楽しませるためであり、営業のためではないと気付く。

日本ではNHKの受信料支払いを法律で義務づける動きがある。ドイツではARD（ドイツ放送連盟）が各戸に年間約3万円の支払いを求める。最初は義務とは思わなかったので無視していたら、追加料金の請求が来て、とうとう裁判所

への呼びだしの手紙が届いた。同僚から「危ないぞ、これは税金と同じ。逮捕される」と脅された。



ほぼ毎週末、夫婦で通っているドレスデンのコンサートホール

聞くと2012年に法律ができたそう
だ。ただし、この税金は連邦政府には行
かず、州政府がインターネットなどの通
信インフラを整備する資金などに充て
る。ヒトラーがラジオで国民を心理操
作した過去の反省による。国連が警告す
る安倍政権の放送干渉のようなことは、
ドイツでは起こらない。

ドレスデンにはオペラ劇場、コンサ
ートホール、オペレッタ劇場と、音楽を楽
しむ世界一流の施設が3つもある。わず
か50万人の都市なのに。それも毎晩、演奏会、オペラ、バレエと満員の状態だ。
そしてそれを支える常設楽団は2つが世界トップ10に入る実力をもつ。友人の奥
さんが「だからドレスデンは税金が高いの」と教えてくれた。それを彼女たちは
同時に誇る。私も毎週鑑賞し「これなら税金は惜しくない」と納得している。

税金は「江戸時代の年貢」ではない

ドイツでは皆が「税金は次の世代への投資」という観点を持っているようだ。
その典型は東西統一による旧東独の復興のために西側が求められた復興税（連帯
付加税）と、2年前に100万人を超えた難民の受け入れに付随する税金だ。

そして、生まれた時から始まる「子ども手当」がある。18歳（学生は25歳）
までもれなく一人約2.5万円ずつの月額手当が支給される。さらに、小学校か
ら大学・大学院まで授業料は無料。次世代を育てるために国（州）が税金で教育
の機会を提供する。貧富に関係なく才能を伸ばす機会を提供する。研究所の若手
に「税金が高いと思わない？」と質問したら、「大学まで無料で教育受けたの
で、税金は当然だと思っている」との返事。すばらしいことだ。

日本では、税金は「年貢」の感覚だ。250年間続いた江戸時代、農民は武士階
級の「生かさず殺さず」の過酷な取り立てを受けた。日本人にとって税金は江戸
時代の年貢というイメージがあるのではないか。今は、武士階級が政治家、官僚
などの特権階級に替わっただけだ。税をかすめ取ろうとした疑惑で国会が賑わっ
ている。無垢な民への税の見返りが見えにくい。

ドイツでは神聖ローマ帝国に見られるように地方分権が基盤であり、12世紀以
降は統治者と被治者の間の契約にもとづく封建統治だった。日本のような一方的
な年貢ではなく、支配者に意見を言える関係だった。それが選挙という形で意思
表示する政治に発展した。

さらに、18世紀後半から始まる産業革命により劣悪な労働を強制された人た
ちがストライキを行い、労働者の権利を獲得して来た。同時に労働者は議会へも進
出した。欧州で税金とは、国民が求める国を実現するための資金と思える。欧州
は列強が地つづきだから、内政をうまくしないと戦争に勝てない現実もあった。
海という自然の要塞を備えた日本とはそこが違う。

ドイツ・ドレスデンに住んでみて、初めて税金を身近に感じている。税金を通
じて富の再分配を積極的に進める政府。税金は高いが、国民が老後を心配せず
に今を楽しく過ごせる社会。文化も余暇も本格的に楽しみながら日々を豊かに送る
ドイツ人をドレスデンで多く見かける。 **論**

